『日本言語文化研究』第21号（2017）

過程（様態・対象）と結果
―個別研究を包括する研究、の一つの試み(二)

糸井　通浩

本稿は、前稿(一)（『日本言語文化研究』第十二号・2008）を継ぐものである。

前稿(一)は、次のような内容であった。

〔序〕本稿のねらい

〔一〕修飾成分にみる様態（過程）と結果

1）「ーと」と「ーに」の対立

2）情態・程度副詞の修飾にみる様態と結果

3）用言（形容詞・形容動詞）の副詞的用法

A　形容詞の連用形

B　形容動詞の連用形

〔二〕文法形式にみる過程と結果

1）格助詞の「に」と「へ」

接辞「に」は格助詞として多様な機能を有するばかりでなく、語素に副詞機能を付加する働きも持っている。その一端は先に、結果を示す修飾成分「ーに」を同類の「ーと」との違いに注目して取り上げた（前稿（一）を参照）。ここでは多様な機能のうち「結果」を示す機能に注目して格助詞「に」を取り挙げ、格助詞「へ」との違いについて考えてみたい。

本来格助詞「に」と「へ」とは、それぞれ独自の異なる機能を有していたはずであるが、用法の近接性から区別が曖昧になってしまっている。それを象徴するのが、室町時代の後期に見られる「京へ筑紫に坂東さ」という諺の存在である（ロドリゲスの『日本大文典』、三条西実隆の『実隆公記』など）。

格助詞の「に」も「へ」も場所名詞に付き、移動動詞と共起する点では共通する面を持っている。現在「東京に行く」「東京へ行く」、「海外に働きに出る」「海外へ働きに出る」などとどちらも用いて、「に」でも「へ」でもどちらでもよい、つまり二つの助詞は移動動詞との格関係では同じ用法を持つと言えるように見える。この用法の近接性から、地域によって「京へ筑紫に坂東さ」と言われるような差が生まれたのだろう。京都では本来は「に」の場合にも「へ」の場合にもともに「へ」を使う傾向にあるというのである。

しかし、本来移動動詞との関係において異なる用法に働く助詞であったことは明らかで、「に」は移動動詞の「帰着点」を指示し、「辺（へ）」を語源とすると言われる「へ」は、移動動詞の示す移動の「方向」を指示する働きを持っていた。「宇宙に飛び立つ」「宇宙へ飛び立つ」、「京都に着く」「京都へ着く」、どちらの表現も可能だとしても、「に」の文と「へ」の文ではニュアンスの違いが感じられる。よく話題になる江戸の俳句「米洗ふ前に蛍の二つ三つ」、香川景樹が「前に」では死んだ蛍ととられかねないから「前を」とありたいところとアドバイスしたという。「前に」「前を」「前へ」、それぞれで句のイメージの異なることが感じ取れる。「死んだ蛍」と見るかどうかはともかく「前に」は静止的で、「前へ」「前を」になると蛍に動き「移動」性が感じ取れる。それは「前に」「前を」「前へ」と共起する動詞ー移動動詞との関係の違い（帰着点と通過点と方向）の残像によるものであろう。

もっとも先の例のうち「京都へ着く」はやや不自然（舌足らず）に感じられる。遠くから移動して来て京都まで来たがまだ先がある、と言ったニュアンスを凝縮した表現とも感じられる。助詞「へ」と動詞「着く」との関係の問題であろう。「京都へ向かう」には不自然さはない。しかも「京都」が目的地（到着点）である場合も考えられる。そして「京都へ行く」「京都に行く」は、いずれも可であろう。

助詞「へ」は「向かう」との共起が最も似合う。方向性を持つ「向かう」と言う動作には動作の始まりと終わりとの間に一定の距離（空間）の隔たりが要求される。この空間的隔たり（と同時に時間的隔たりを伴う）がない動作には助詞「へ」は使えないとも言える。A「向こう岸へ向かう」と言えるが、B「向こう岸に向かう」とも言う。しかし、B の「向こう岸」が移動の

目的地を指すのに対して、Aの「向こう岸」は移動の方向を意味するのが本来の用法であるが、移動の目的地でもあり得る。ともかく助詞「に」の方は必ずしも空間的隔たりを必須の条件とはしない。「蝶が壁にぶつかる」「＊蝶が壁へぶつかる」、「壁にポスターを貼る」「＊壁へポスターを貼る」、助詞「へ」は「ぶつかる」「貼る」など瞬間的動作とは共起しないと言うことである。

以上の考察から見えてくるのは、移動動詞との関係で言えば、助詞「に」は移動の帰着点を示す、つまり動作の「結果」を示す働きを持ち、助詞「へ」は移動の方向を示す、つまり一定の隔てた距離を移動して目指す先を示す働きを持つ。移動の「過程」が意識されているのである。

A「＊向こう岸に泳ぐ」、B「？向こう岸へ泳ぐ」

「泳ぐ」は移動動詞でも移動手段・方法を示すだけの動詞であるから、「に」とも「へ」とも共起しない。Aは「向こう岸に泳ぎ着く」とすれば、「＊」がとれる。Bは「向こう岸へ向かって泳ぐ」とするなら適格文になる。同じ帰着点を指す助詞「まで」を用いて「向こう岸まで泳ぐ」なら適格文である。「まで」は「から」（出発点）とペアで移動動作の範囲（時間・空間）を限定する。「泳ぐ」という動作の範囲（ここでは空間）を限定することから、助詞「まで」と「泳ぐ」は共起するのだと考えられる。

「向かう」「行く」など方向性（これらの場合認知主体から離れていくという方向性）をもつ移動動詞では、現在「に」も「へ」も用いているのである。

2）「ている」形の用法ー過程と結果

日本語の文法史で際立つ事象の一つに、助詞「て」の発達と文法化がある。その中でも「て」フォームと呼ばれる文法形式は、日本語が近代化するための大きな要因になっている。「ーていく」「ーてあげる」「ーくれる」「ーてしまう」等々で、動詞の文法化が進み、さまざまな、いわゆる補助動詞が生み出されてきた。「ーている」もその一つである。

「ーている」の「いる」は動詞「居る」の文法化したものである。現代語の共通語では存在詞は「ある」と「いる」とが併存し一定の使い分けをしているが、古典語では本来「あり」系の語[注1]だけで、「居る」は、「立ち居」など座るの意やじっと動かない状態、とまる、とどまる、住むなどを専ら意味した。もっとも早くから「涙ぐみて居たまへり」（源氏物語・少女）などと、

現代語の「一ている」を思わせる例も見られるが、「居る」はまだ文法化した補助動詞にはなっておらず、動詞の機能を持っている。「居る」が補助動詞化するのは、存在詞「いる」となったのに合わせて、鎌倉・室町時代あたりから日本語の近代化の趨勢の中にあって文法化してきたものと観察される。

「(動詞連用形) ている」の意味・用法には、「継続」「結果 (パーフェクト)」「経験・記録」などがあると言われる。「ている」は、動詞を状態化して、その状態が持続していることを示す。動作が持続性をもった動詞 (継続動詞という) につく「ている」は「継続 (動作そのものが持続している状態)」の用法になり、動作が瞬間性をもった動詞 (瞬間動詞という) につく「ている」は「結果」(動作の完了後の結果が持続している状態) の用法になる。動詞は本来時間性を持つ。動作の始まりから終わりまでに時間が伴うが、動詞の示す動作・作用の時間の「はば」、つまりその持続性・瞬間性の識別は、日常における通常の認識による。

さらに「ている」は「経験・記録」という意味・用法をもつが、これら全てを包括して「ている」の文法機能を、定延利之は「観察によれば、これこれという情報がある (という現在の状態)」ことを示す、つまり「エビデンシャル」な機能を持つとする[注2]。「ている」によって、動詞の示す動作・作用が一定の時間のはばを有する状態として認知されるのである。その状態は認知主体 (表現主体) による観察を可能にする。「観察」は視覚に限るわけではない。「急にそんなこと言われても困る」の「困る」主体は一人称に限られるが、「急にそんなこと言われても困っている」と「ている」形にすると、三人称を主語に立てることも可能になるのである。「私はそう思う」と「私はそう思っている」の違いや司会者の言葉「では会議を始めたいと思います」に対して「では会議を始めたいと思っています」がやや不自然になる理由も同じ原理で説明が付く。

アスペクトを示す「継続」(過程) と「結果」という意味・用法の違いにかかわらず、現代日本語の共通語では、両用法を同じ「ている」形を用いて意味し、形態的な区別をしない。しかし、ここで方言に目を転じてみると、人の存在を示すのに、東日本では「いる」を用い、西日本では「おる」(古語「をり」に由来する。「をり」は「ゐあり」の融合形か) を用いることがよく知ら

れているが、西日本の各地の方言では、アスペクトを示す「継続」（過程）と「結果」の両用法を形態的に区別して示す。「ー（し）よる」と「ー（し）とる」という区別がある。「ー（し）よる」は、「動詞連用形＋おる」の訛伝形であり、「ー（し）とる」は「動詞連用形＋て＋おる」の融合した形である。前者の形が「継続」を意味し、後者の形が「結果」を意味する。いわば「継続（過程）」と「結果」が西日本の方言では、形態的にも区別されている。

アスペクトを示す「継続」（過程）と「結果」を共通語では形態的に区別しないが、方言では区別するところがあると言うことになる。むしろ、後者の方言に見るように「区別」を形態的に示す方が「世界的な標準」だと言われる[注3]。各地方言における実態など、詳しくは注③の文献を参照されたい。ただし、「ー（し）よる」、「ー（し）とる」の使用や区別の実態には方言によって大小の違いがあるが、おおざっぱには、「ー（し）よる」形の意味・用法が「ー（し）とる」形に吸収されて、共通語の「ている」形と同様に「ー（し）とる」形が「継続」（過程）も「結果」も意味するようになってきているように思われる。

さて、「継続」の意味を示す「ー（し）よる」の祖型「動詞連用形＋おる」（例：「来おる」）を複合動詞型と呼び、「結果」の意味を示す「ー（し）とる」の祖型「動詞連用形＋て＋おる」（例：「来ておる」）を「て」フォーム型と呼ぶことにする。実は、「居る」についても古代から、この両型の事例は多く観察される。つまり「泣き居る」の複合動詞型と「涙ぐみて居る」の「て」フォーム型とである。動詞としての「居る」が持つ意味（座る）が「状態の持続」という意味合いを持つことから、何かの動作の状態化を示す機能を持つようになるが、しかし、「継続」の意味を受け持ちうる可能性を持っていた複合動詞型は衰退していき、「結果」の意味を受け持つ「て」フォーム型だけが残り、現代語の「ーている」形だけが事態の状態化を示す機能を獲得して、「結果」ばかりか「継続」の意味・用法をも持つに至ったものと思われる。方言によって、「ーよる」「ーとる」の併存から、「ーよる」の意味・用法を吸収して「ーとる」に統一されているものがあるが、ここでも「結果」の意味・用法の「ーとる」の方が生き残ってきている。

さらに遡って成立していた両型の併存があった。完了の助動詞「り」と「た

り」のことである。「り」は「動詞連用形＋あり」、つまり複合動詞型の融合形から抽出される助動詞で、「たり」は「動詞連用形＋て＋あり」、つまり「て」フォーム型の融合から生まれた助動詞である。しかし、「り」と「たり」との違いについては、「り」の場合には接続する動詞が四段動詞とサ変動詞に限られるという制限があったが、後発の「たり」は全ての動詞に接続することができた。やがて、「たり」が「り」を駆逐していく。「たり」は「継続」「結果」両方の意味・用法に用いられた。

「てあり」の融合形「たり」が、いわゆる実現（過去とも）を意味する「た」形になっていく一方、後世の「て」の発達の流れで「一て侍り」という文法形で用いられることもあったが、「てある」がアスペクト形のメインをなすことはなく、「ている」にその位置を譲ってしまうことになる。そして現代語では「一てある」は「ている」の未分化な（「継続」と「結果」の区別のない）状態を補完する機能として働いていると説明される[注4]。例えば、「母が弁当を作っている」の「ている」は「継続」を意味し、できた弁当が存在するという、「作る」動作完了の「結果」は示さない。そこで「弁当が作ってある」と「てある」を用いて、「結果」を示す補完をしているのである。「を」格が「が」格に変わることに注意したい。

「結果」を示す「てある」が補完する場合として、次のような場合もある。他動詞「集める」の「ゴミを集めている」は「継続」を意味し、自動詞「集まる」の「ゴミが集まっている」は「結果」を意味するという、自他の対応がある（このことについては後述）。しかし例えば、「乾かす」「乾く」が自他の対応をなすのに対して、他動詞「干す」は対応する自動詞を持たないといった場合、他動詞による「洗濯物を干している」は「継続」を意味するが、「結果」を示す自動詞がない。そこで、「干し」た「結果」を示すときは「洗濯物が干してある」と「てある」を用いることになる。「てある」は動作作用を状態化することから、動作作用の完了の結果、状態化している事物は「が」格で扱われることになる。

「手紙を書いている」の動作完了に伴う「結果」は、「手紙が書いてある」となる。余談であるが、「てある」と共起する動詞には制約がある[注5]ことや、「手紙が書いてある」と「手紙は書いてある」とでは用法に異なりがある

こと、つまり前者は話者が客観的に観察している場合に対して、後者は話者が動作主体(の意志的行為)である場合も含まれることに注目しておきたい。

なお、「てある」同様、「ておく」も意志的動作、ないしは意志的に行われる行為に共起して、未来に実現する「結果」、あるいは未来のための現在の行為を意味する意味・用法に働く。「弁当を作っておく」「明日のために今日のうちに薬を飲んでおく」「これだけは言っておく」「よくよく考えておく」などと用いる。

〔三〕動詞体系にみる過程（対象）と結果

これまで〔一〕〔二〕で、日本語における過程と結果の区別に関わる言語事象を整理してきたが、「過程」については「様態」「対象」「継続」などとも言い換えることがあった。「過程」と言い「結果」と言い、いずれも動詞のアスペクトに関わる意味用法である。結局は、これまで見てきた言語事象は動詞との関係を抜きにしては考えられない事象であった。そもそも動詞自体がその意味内容において、「過程」や「結果」と深く関わっていたのである。

1)「複合動詞」の生成にみる過程と結果

A　西日本の各地方言にみる「ーよる」「ーとる」の生成方法

「ーよる」は「動詞連用形＋おる」の融合形で「継続（過程)」を意味し、「ーとる」は「動詞連用形＋て＋おる」の融合形で「結果」を意味した。前者を先には複合動詞型と言ったが、例えば「なきよる」は「泣きおる」から生成されたと言える。元の「泣きおる」は複合動詞と言ってもいい語構成だからである。「ーおる」が存在の動詞の働きからその「状態性・持続性」の機能が文法化して「泣く」という動作が持続・継続していることを示す機能語としてのみ働くようになって、「継続」を示すアスペクトの用法を持つに至ったというものである。

B　格助詞「に」と「泳ぎ着く」

先に不自然さを感じる「岸に泳ぐ」も「岸に泳ぎ着く」とすると適格な文になること述べたが、「泳ぎ着く」は複合動詞である。このように「泳ぐ」が到着点を示す格助詞「に」と共起するには、「泳ぎ着く」という複合動詞が生成されねばならなかったのである。「泳ぐ」は到着点を示す格助詞「に」を要

求する動詞ではなく、単に移動するという動作で移動の方法・手段を示すだけの動詞であるからである。「泳ぐ」は動作の過程（持続）を示し「着く」がその動作の「結果」を示しているのが「泳ぎ着く」である。

C　相撲の決まり手「押し倒し」

「押し倒し」は、影山太郎の指摘する複合名詞[注6]であるが、「押し倒す」という複合動詞の名詞形である。「押す」という方法・手段だけでは、勝負の決着を示すことにならず、相手に土をつける「倒す」という動作がともなって勝負は決まる。「押す」という手段方法（過程）を経て「倒す」が勝負の「結果」を示している。相撲の決まり手には、こうした複合動詞一名詞がかなりある。「手段・方法＋決着」の構成になる複合動詞は沢山存在する[注7]。

その他、泳ぎ渡る、走り去る、飛び越す、押し込める、かみ砕く、聞き知る、仰ぎ見る、切り取る、等々。これらは「泳ぎ渡る」「かみ砕く」を「泳いで渡る」「かんで砕く」のように二つの動詞を助詞「て」でつないだ表現にすることができる。「泳ぐ」「かむ」ことが「渡る」「砕く」ことにもなったこと（結果）を意味する。「泳ぐ」「かむ」ことと「渡る」「砕く」こととが同時的関係にある。その点で「遊んで帰る」など、二つの動作が継時的関係にある場合と異なる。

2）自動詞・他動詞の体系と過程・結果

日本語では、一つの動作概念を「働きかけ」か「物の変化」かの区別に応じて異なる形態で示すことが徹底している。自動詞、他動詞という形態である。また、基本的モデルとして、自動詞から他動詞を派生する方程式に、自動詞に「す」をつける方法があった。「浮く」から「浮かす」など。逆に他動詞から自動詞を派生する方程式に、他動詞に「る」をつける方法があった。「刺す」から「刺さる」など。こうして派生した他動詞あるいは自動詞は数多い[注8]。また生成当初から「なす」と「なる」、「足す」と「足る」など、自他の対応を形態的に備えていた類いもある。接辞「す」は他動詞を作る機能を持ち、接辞「る」が自動詞を作る機能を持っていたことが分かる。例は少ないが、接辞「ゆ」は接辞「る」同様自動詞を派生する機能を持っていた。これら接辞「す」と「る」（「ゆ」も）が、「使役」用法を本義とする助動詞「す・さす」と「自発」用法を本義とする「る・らる」[注9]に語源的に同源である

ことは容易に想像がつくが、このことは次の事実からも了解できることである。

自動詞と他動詞の対応関係には三種がある。

A　自動詞、他動詞が対応している群（対応する自動詞、他動詞が複数あるものもある）

B　対応する他動詞を持たない自動詞　例：走る、咲く、降るなど

C　対応する自動詞を持たない他動詞　例：食べる、書く、話すなど

Bの場合、他動詞を欠くが、犬が走る、花が咲くなどを、犬を走らせる、花を咲かせるなどと使役の助動詞を用いて他動詞的表現を補完する[注10]。また、Cの場合、自動詞を欠くが、パンを食べる、悪口を書くを、パンが食べられる、悪口が書かれるなどと受身の助動詞を用いて自動詞的表現を補完することができる。「自動詞＋す・さす」が他動詞の肩代わりをし、「他動詞＋る・らる」が自動詞の肩代わりするのである。

さて、Aの場合、他動詞と自動詞の対応が、「働きかけ（過程）」と「その結果の状態」の対応になっている一群が存在している。「集める」その結果「集まる」、「分ける」その結果「分かる」（分かれる）、「（電話を）かける」その結果「かかる」などがその例である。そして、「なす」（他動詞）その結果「なる」（自動詞）が象徴しているように、他動詞の多くが働きかけという動作の「過程」を示し、自動詞の多くが働きかけの「結果」を示す。いわば自他の対応が過程動詞と結果動詞の関係である一群が存在するのである。事象は「す（る）・なす」→「なる」→「あり（る）」という展開をなすのである。但し、働きかけは、かならずしも働きかけの意図を実現（結果）させるとは限らない。電話はかけてもかからないことがあり、大学は受けても受からないこともあるのである。しかし、かけなければ電話はかからないし、大学は受けなければ受からない。

他動詞は通常「を」格を要求する。しかし、「を」格と動詞との関係は一様ではない。「小説をよむ（読）」、「和歌をよむ（詠）」、どちらも動詞「よむ」であるが、前者の「小説」は既に存在しているもので働きかけの動作（「よむ」）中の「対象」であり、後者の「和歌」は動作（「よむ」）が終了してその「結果」存在するものである[注11]同様の例に、「魚を焼く」と「パンを焼く」、「庭

（土）を掘る」と「穴を掘る」などがある。それぞれ前者の「を」格を動作対象「格」、あるいは過程目的語、後者の「を」格を結果「格」あるいは結果目的語と呼んで区別できる。結果目的語をとる動詞を結果動詞というなら、それには、制作・生産などを表す動詞が属することになる。「（絵を）描く」「（船を）造る」「（湯を）わかす」等々で、いずれも動作・作用の結果存在することになるものを「を」格で示している。

最後に類義語にみる「過程」と「結果」の対立の例を見ておきたい。

同じ「上下」の漢字で表記する、「あがる・さがる」と「のぼる・くだる」の違いについては類義語研究の話題であった。いずれも自動詞群である。前者には対応する他動詞があるが、後者にはない。「はしごをのぼって、屋根にあがる」などの例が示すように、結論的には、「あがる・さがる」は帰着点（あるいは出発点）を要求する結果動詞てあり、「のぼる・くだる」は移動動作を示す、いわば過程動詞である。「山をのぼる」「山のぼり」は適格文であるが、「山をあがる」「山あがり」は不適格になる。

自動詞の移動動詞は「を」格を採って移動の通過点を示す用法を持っているのである。「海を渡る」「空を飛ぶ」「鳥居の前を走る」など。「米洗う前を蛍の二つ三つ」の「を」がその例であった。

［注］

1．「あり」の外に「をり」「侍り」「いまそかり」があった。

2．定延利之「心内情報の帰属と管理ー現代日本語共通語「ている」のエビデンシャルな性質について」（中川正之・定延利之共編『言語に現れる「世間」と「世界」』くろしお出版・2006刊）

3．工藤真由美・八亀裕美『複数の日本語ー方言からはじめる言語学』（講談社選書メチエ・2008刊）

4．注3に同じ。

5．働きかけの他動詞や意志的な自動詞（主体の変化）が共起する。影山太郎『ケジメのない日本語』（岩波書店・2002刊では、「状態の変化」や「位置の変化」など「変化の意味を含む」ものに限ると指摘する。

6．影山太郎『ケジメのない日本語』（岩波書店・2002刊）

7．影山太郎『文法と語構成』（ひつじ書房・1993刊）

8．鈴木丹士郎「動詞の問題点」（『品詞別　日本文法講座3　動詞』明治書院・1972刊）

9．ここでは、「す・さす」に「せる・させる」を、「る・らる」に「れる・られる」を含むものとする。「る・らる」の本義を「自発」と見ることについては、拙稿「不可能の自覚一語りと副詞「え」の用法」（共編著『王朝物語のしぐさとことば』清文堂2008刊）

10．他動詞化した「咲かす」「降らす」「行かす」を見かけることもある。文部省唱歌の「ウミ」（昭和16年3月）の三番に「ウカバシ（テ）」と「浮かばす」という他動詞を用いていたが、昭和55年指導要領の改訂の際、「うかばせ（て）」（自動詞＋使役せる）に変更している。

11．和語「よむ」は本来「数える」を意味する動詞であったが、歌を詠む、文字を読むにも転用されるようになった語。。

（龍谷大学名誉教授）